



● 科研B「戦前期における中等諸学校(師範学校)生徒のアジア認識に関する総合的研究」が最終年度となった。● 2014年度は、10月5日、教育史学会大58回大会で、コロキウム「日本統治下における中等学校(師範学校を含む)校友会雑誌研究の意義と課題」を開催した。● 最終年である本年は、下記のように、11月13日と14日、台湾師範大学の台湾史研究所、同図書館、台湾教育史研究会、台湾歴史博物館、の主催、中華民国科技部、台湾師範大学研究所、台湾師範大学文學院、の後援をもつての、国際シンポジウム、「近代東亜の教育と社会 国際學術研討會」(台湾師範大学国際會議場)に、本科研メンバーを招いていただいた。

● 呉文星先生の台湾における権威、名声によるものであること、いうまでもない。● 科研の申請に際して、2012年12月7日(金曜日)、台湾師範大学文學院の5階、歴史系16番研究室に先生をおたずねした。● 午前9時、「呉文星老師」と書かれたドアの前で、一つ深呼吸をしたことを覚えている。「報告書を出すときには60歳になるのか」と思っていた。● 呉文星先生はもとより、斉藤先生をはじめ、優秀なメンバーに励まされて、ここまでくることができた。感謝したい。



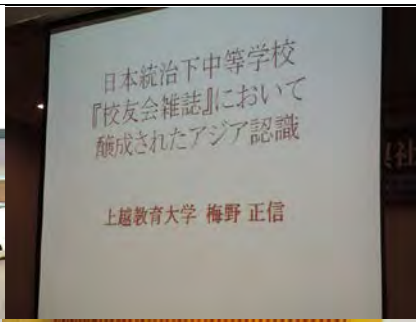
● 11月13日(金)9時40分、台湾師範大学図書館の国際會議場で、シンポジウムの開会となった。師範大学の院生さんたち、日本からの留学生たちが、懸命に裏方を担当されていた。実施面での総責任者、許先生のご尽力に感謝である。



● 9時50分から開会式。進行は日本からの留学生が中国語で、台湾の院生が日本語でアナウンスをする。とても流暢な発音に驚かされる。● 主催者を代表して、台湾歴史博物館館長、台湾史研究所所長、文學院院長の挨拶があった。● 参加者は140人あまりになっていた。



● 斉藤利彦先生の基調演講「『校友會雑誌』の中の帝国日本-満州事變前後のアジア認識をめぐって-」が始まる。呉文星先生の司会、末武美佐さん(博士課程)の通訳を得て、少年たちが強いられた帝国イデオロギーの解明が、現代的課題なのだ、提案された。



●陳登武先生(文学院院长)の司会で、私が「日本統治下中等諸学校『校友会雑誌』において醸成されたアジア認識」を、市山雅美先生から「1940年前後の台湾の中学生のアジア認識-校友会雑誌の記述より-」を報告する。

●通訳は津田勤子さん(博士課程生)である。

●私の報告には、討論者である富田哲先生(淡江大)から民族性の違いについての的確な指摘をいただいた。



●金恩淑先生は「京城師範学校の修学旅行」、徐鐘珍先生は「植民地「朝鮮」の校友会雑誌からみるアジア認識—京城中学校『校友会誌』を中心に—」、そして呉文星先生から、「日治時期台湾師範学校の修学旅行」の発表があった。

●司会は、翁麗芳先生。通訳は、院生の安井大輔さんである。

●修学旅行は、科研開始時から主題の一つとして、話題に上がっていた。その主題を、最初の研究会から意欲的に受け止めていただいたのが、呉文星先生だった。本当に頭が下がる。



●張素王分先生(台湾師範大)の司会で、林玫君先生(師範大)「日治時期台湾の臨海教育」、金湘斌先生(高雄師範大)の「1916年〈体操科教授要目取調委員報告書〉の考察」を聴く。

●右の写真からもわかるように、シンポジウムは、全体を通して、笑顔に笑顔で応じるような、とても和やかな雰囲気の中で行われた。●金報告では牛志奎先生が討論人となる。金先生は金沢大学で纏足の研究をされている。体育が近代化に果たした役割を興味深く拝聴した。



●11月14日(土)は、大会運営の責任者、許佩賢先生(師範大)ではじまった。「学籍簿からみた日治末期公学校女性の学習状況」、謝仕淵先生(国立台湾歴史博物館)の「空襲下の学校行事と学生疎開」を聴く。●許先生もだが、謝先生の報告も、学籍簿などを取り上げた実証研究でとても興味深か





った。●討論者の指摘は厳しいし、内容的には緊張したやりとりがあるのだが、はしばしに笑顔が絶えない。フロアもそうである。●院生たちに聞くと、歴史学系の研究指導はとても厳しいということだが、互いに研鑽をつむ真摯な姿勢が伝わってきて、感じ入った。



●2日目午前の後半では、私が司会を務めた。安井さんに通訳をお願いする。前日から胃の痛い思いをした。とても緊張する。●大浜郁子先生(琉球大)の「近代日本による沖縄と台湾」はとても勉強になった。司会をするために、先生の論文を読んできた。植民地に対する施策と位置づけについて、教えていただいた。●祝若穎先生(清華大学博士課程)は、「日本植民地下民主主義の唱道者-林茂生と吳天錫-」は、コロンビア大学留学で新教育を学んだ台湾と韓国の2人の人物を比較したものだ。●林は2.28で虐殺され、呉は戦後の韓国を生きる。司会をしながら、討論を含め、感銘を受けた。



●最後は、葉碧苓先生(輔仁大)「台北帝国大学工学部の創設」、鄭政誠先生(中央大)の「第二次大戦前後の大陸報刊雑誌中の台湾教育現場書写」だった。●司会は周婉窈先生(師範大)る周先生は、呉文星から、7人(8人だったか?)で台湾教育史研究会を立ち上げた時からのメンバーですよ」と教えていただく。●そのような歴史があって、いま、会場を包む真摯で思いやりのある雰囲気、得られているのだろうか。この2日間、幾度も考えさせられた。



●15時30分から、総合討論となる。司会を私と呉文星先生が担当する。●10分前に、「日本側の発表をまとめてください」と告げられる。懸命に話したつもりだが、ずっと冷や汗をかいていた。安井さんに通訳をお願いする。●呉文星先生の優しい笑顔とともに、会が閉じられた。